

勝鹿の真間の手兒名

南 寿宏

昔話に、「妻争い伝説」というパターンがある。複数の男性が一人の美女を求めて争い、それを悲嘆した美女が命を絶つというものである。竹取物語のかぐや姫はその一例であり、室戸ユネスコ世界ジオパークの「びしゃご岩」伝説も然り。万葉集にも、芦屋の菟原娘子(うなひをとめ)、櫻兒(さくらこ)、縵兒(かづらこ)、そして今回の葛飾の真間の手兒名(ままのてこな)の伝説の歌が載っている。なお、手兒奈は手兒奈とも表現するが、本稿では手兒奈に統一した。

それぞれの歌の番号は次のとおりである。

菟原娘子	1,801	1,802	1,803	1,809	1,810	1,811	4,211	4,212
櫻兒	3,786	3,787						
縵兒	3,788	3,789	3,790					
真間の手兒名	431	432	433	1,807	1,808	3,384	3,385	3,386 3,387

本稿は、真間の手兒奈の歌を紹介する。

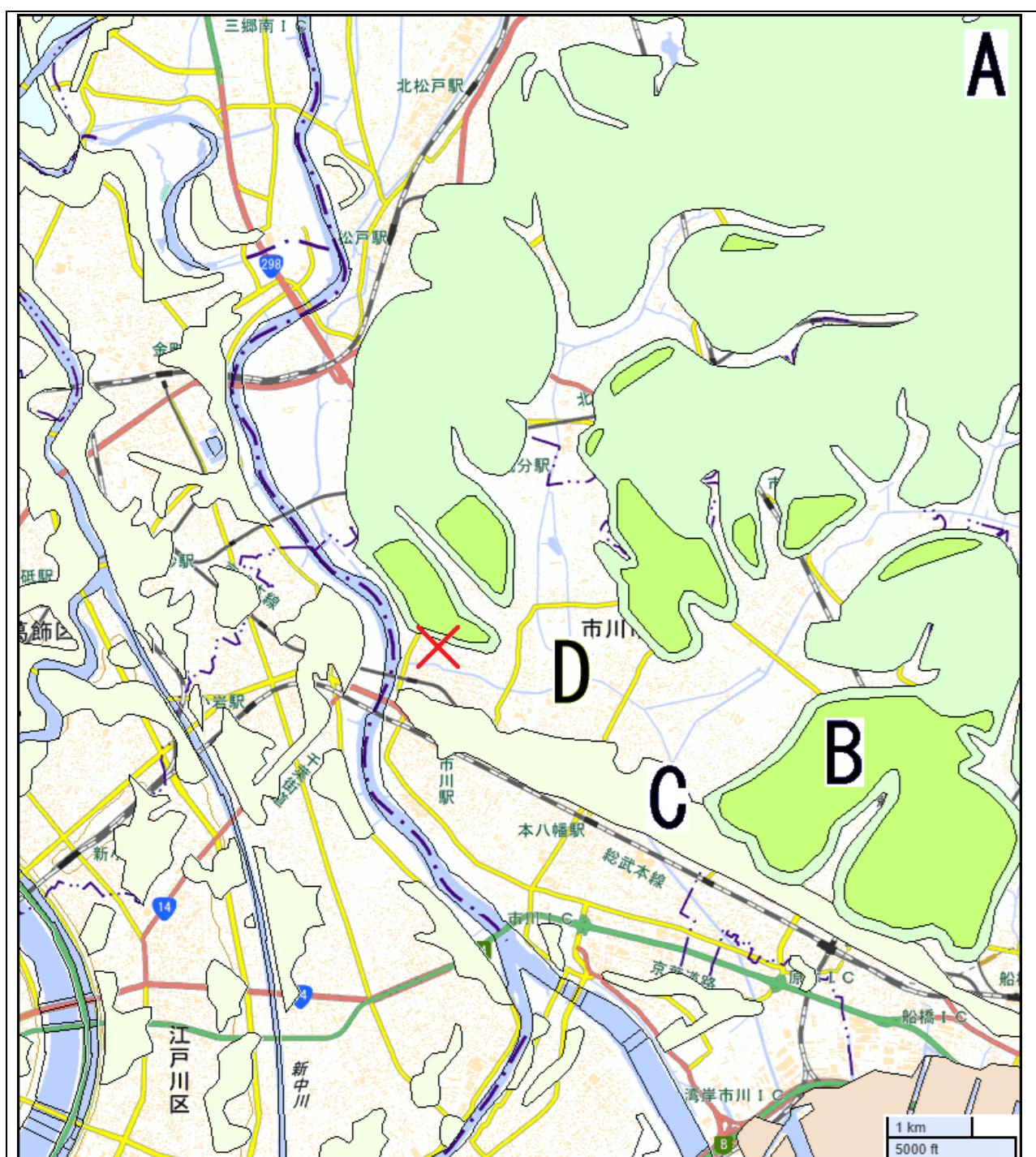
過勝鹿真間娘子墓	山部宿禰赤人	作謠一首	并	短謠	
勝鹿の真間の娘子が墓を過ぐるとき	山部宿禰赤人が	作る謠一首	并せて	短謠	
かつしかのままのをとめがはかをすぐるとき	やまべのすくねあかひとが	つくるうたいつしゆ	あはせて	たんか	
古昔	有家武人之	倭文幡乃	帯解替而	廬屋立	妻問為家武
古に	在りけむ人の	倭文幡の	帯解きかへて	伏屋立て	妻問ひしけむ
いにしへに	ありけむひとの	しづはたの	おびときかへて	ふせやたて	つまどひしけむ
ずっと昔	いたという男が	倭文織りの	帯を解き合つて	寝屋を立て	共寝をしたという
勝壯鹿乃	真間之手兒名之	奥柳平	此間登波聞杼	真木葉哉	茂有良武
葛飾の	真間の手兒名が	奥つ城を	こことは聞けど	真木の葉や	茂りたるらむ
かつしかの	ままのてこなが	おくつきを	こことはきけど	まきのはや	しげりたるらむ
葛飾の	真間の手兒奈の	墓は	ここと聞いたのだが	真木の葉が	茂っているからか
松之根也	遠久寸	言耳毛	名耳母吾者	不所忘	万葉集 卷三 431 山部宿禰赤人
松の根や	遠く久しき	言のみも	名のみも我れは	忘らえなくに	
まつのねや	とほくひさしき	ことのみも	なのみもわれは	わすらえなくに	
松の根のように	遠く久しいからか	言い伝えも	名前すら私は	忘れられない	
吾毛見都	人余毛將告	勝壯鹿之	間々能手兒名之	奥津城處	万葉集 卷三 432 山部宿禰赤人
我也見つ	人にも告げむ	勝鹿の	真間の手兒名が	奥つ城ところ	
われもみつ	ひとにもつげむ	かつしかの	ままのてこなが	おくつきところ	
私も見た	人にも告げよう	葛飾の	真間の手兒奈の	眠っているところを	
勝壯鹿乃	真々乃入江余	打摩	玉藻苺兼	手兒名志所念	万葉集 卷三 433 山部宿禰赤人
勝鹿の	真間の入り江に	うち靡く	玉藻刈りけむ	手兒名し思ほゆ	
かつしかの	ままのいりえに	うちなびく	たまもかりけむ	てこなしおもほゆ	
葛飾の	真間の入り江に	靡いている	美しい藻を刈ったという	手兒奈が偲ばれる	

『真間の手兒奈』の『真間』は崖を、『手兒』は女の子を、『奈』は～ちゃんを意味する。手兒奈のいたところは現在の千葉縣市川市真間町と考えられている。赤人の433により、当時の真間には玉藻を刈ったという入り江が広がっていた。そのことは、次の3,385でも示される。

可豆思賀能	麻萬能手兒奈我	安里之可婆	麻末乃於須比余	奈美毛登杼呂余	
勝鹿の	真間の手兒奈が	ありしかば	真間のおすひに	波もとどろに	
かつしかの	ままのてこなが	ありしかば	ままのおすひに	なみもとどろに	万葉集 卷十四 3,385
葛飾の	真間の手兒奈が	いたから	真間の磯辺に	波まで打ち寄せていたんだ	作者未詳
豆知識					
(本歌の表記は、1字1字が対応する非略体歌。)					
(おすひは汚水ではなく、磯辺(いそへ⇒いそへ)の方言。当時の東国の方言が分かる一級資料である。)					

万葉集に掲載の歌は8世紀前半に詠まれたもので、手兒奈伝説はそれ以前のものである。当時は海水面が現在よりも高く(平安時代以前ではあるが、平安海進と呼ぶ。本会報 p.3 参照)、崖下に波が打ち寄せていた。

そのころの海岸線は、いくつか予想されている。本稿では、p.5 に産総研シームレス地質図のものを、p.6 に市川市立市川考古博物館展示のものを載せる。



市川市周辺 地形地質図
 (産総研シームレス地質図を編集)
 縄文時代は A,B が陸地、手兒奈の時代は A,B,C が陸地
 × は手兒奈霊神堂

A N35.7574 / E140.0067 / 標高25m Q3_sb 堆積岩 形成時代 新生代 第四紀 後期更新世 岩相 汽水成層ないし海成・非海成混合層	B N35.7297 / E139.9710 / 標高24m Q31_std 堆積岩 形成時代 新生代 第四紀 後期更新世前期 岩相 段丘堆積物	C N35.7239 / E139.9358 / 標高2m H_svd 堆積岩 形成時代 新生代 第四紀 完新世 岩相 自然堤防堆積物	D N35.7370 / E139.9305 / 標高3m H_sad 堆積岩 形成時代 新生代 第四紀 完新世 岩相 谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物
---	--	---	--



約 4,000 年前(縄文時代)の市川市の推定海岸線
市川市立市川考古博物館展示(同館長転載許可 令和 5 年 1 月 9 日付 No.138)

真間の手兒奈伝説とは、次のとおりである。

葛飾の真間は、どこで井戸を掘っても、塩水が湧き出た。しかし、1つだけ真水が湧き出る井戸があった。これが真間の井戸である。

葛飾の真間に、手兒奈という美女がいた。彼女はこの真水が湧く井戸でいつも水を汲んでいた。

彼女は多くの男に言い寄られたが、誰にもなびかなかった。彼女に言い寄った男たちの間には、いざこざが絶えなかった。

手兒奈はそのことを嘆き、真間の入江に身を投じた。翌日、手兒奈のなきがらは、浜に打ち上げられた。里人たちは彼女を真間の井戸のそばに手厚く葬った。

現在、真間の井戸は「亀井院」というお寺の庭にある。亀井院の向かいには、手兒奈を祭った「手兒奈霊神堂」がある。

市川駅から亀井院までは、上図で古市川湾と呼ばれる干潟が広がり、『真間の継橋』という橋が架かっていた。この橋の名は現在、長さ数 m の橋として残っている。橋のたもとの喫茶「つぎはし」のサイフォンコーヒーは絶品。下写真は、つぎはしを南から望んだものである。



真間の井戸
R5/1/9 撮影(南寿宏)



つぎはしと喫茶つぎはし

